

## 第1 当用漢字について

### 〔当用漢字表〕

#### 1 取り扱い方について

##### ① 使用する漢字の範囲

(1) 告示の「前文」に、「現代国語を書きあらわすために、日常使用する漢字の範囲を、次のように定める。」とある。

(2) また、告示の「まえがき」に、「この表は、法令・公用文書・新聞・雑誌および一般社会で、使用する漢字の範囲を示したものである。」とある。

(注) 第1期国語審議会漢字部会では、「当用漢字表は、法令・公用文書・新聞・雑誌および一般社会で使用する漢字の範囲を示したもので、したがって制限表である。」と了解していた。

(昭和27.3.10 第13回総会報告)

##### ② 適用範囲

(1) 告示の「まえがき」に、「この表は、法令・公用文書・新聞・雑誌および一般社会で、使用する漢字の範囲を示したものである。」とある。

##### ③ 固有名詞

(1) 固有名詞の取り扱いについては、告示の「まえがき」に、「法規上その他に関係するところが大きいので、別に考えることとした。」とある。

(2) 人名については、「当用漢字表に掲げる漢字以外に人名に用いてさしつかえない漢字」として人名用漢字別表(昭和26.5.25内閣訓令・告示)が定められている。

### ① 使用する漢字の範囲

- (1) 「範囲」という表現はそのままにして、その解釈を「基準」とするよう処置すべきである。
- (2) 「範囲」という表現を廃止して、「基準」という意味を表現するように改正すべきである。
- (3) 上記の「基準」については、これを「最低の基準」とすべきであるとする考え方と、「使用範囲の標準」とすべきであるとする考え方の二つがある。
- (4) 適用範囲や字種を選択等について、実情に即して改善すれば、範囲の解釈については、従来どおりでよい。

### ② 適用範囲

- (1) 「一般社会」が具体的に何をさすか不明確であるから、その内容を明確にするとともに、それに即した表現に改めるべきである。
- (2) 一般の新聞・雑誌に掲載される文芸作品、学術論文などは、適用範囲内か、または適用範囲外であるかを明らかにすべきである。
- (3) 広告文は、適用範囲内か、または適用範囲外であるかを明らかにすべきである。

### ③ 固有名詞

- (1) 子の名をつける場合を除いて、その他の固有名詞については、当用漢字の適用外とするか、または、次の(2)、(3)のような処置を講ずべきである。
- (2) 都道府県名、主要都市名などに使われている表外字を当用漢字表に加えるか、または地名のみの別表を作るべきである。
- (3) 姓に使用されている表外字のおもなものを当用漢字表に加える

(注) (ア) 戸籍法第 50 条 「子の名には、常用平易な文字を用いなければならない。常用平易な文字の範囲は、命令でこれを定める。」

(イ) 戸籍法施行規則第 60 条「戸籍法第 50 条第 2 項の常用平易な文字は、左に掲げるものとする。

1 昭和 21 年 11 月 内閣告示第 32 号 当用漢字表に掲げる漢字

2 昭和 26 年 5 月 内閣告示第 1 号 人名用漢字別表に掲げる漢字

3 片かな又は平がな(変体がなを除く。)」

(3) 地名については、当用漢字表制定の趣旨に即して、できるだけわかりやすく読みちがいの起こらないよう適当な処置がとられることを希望して、国語審議会から「町村の合併によって新しくつけられる地名の書き表わし方について」内閣総理大臣あてに建議されている。(昭和28.10.8)

(注) この建議は、その後、総理府から地方自治庁に回付され、地方自治庁では、町村合併推進本部の委員に建議文の写しを配布した。この委員会の席上、文部省初等中等教育局長からその趣旨の説明があり、さらに、昭和 28 年 10 月 30 日には、都道府県の地方課長会議で建議文の写しについて、地方自治庁側から説明があった。

町の名称についての規定は、次の法律などに見えておりである。

住居表示に関する法律(昭和37.5.10)、第 5 条「～当該区域内の町又は字の名称は、できるだけ読みやすく、かつ簡明なものにしなければならない。」とあり、街区方式による住居表示の実施基準(昭和38.7.30自治省告示第 117 号)には、

「第 1 住居表示の実施基準

か、または姓のみの別表を作るべきである。

(4) 上記に関連して、地名・人名以外の固有名詞の取り扱いをどうするのか問題がある。

(5) 子の名に用いる漢字を制限することは、不当である。

## 1 町の名称の定め方

- (2) あらたに町の名称をつける場合には、当用漢字を用いる等簡明を旨とすること。」とある。

### ④ 専門用語

- (1) 専門分野については、当用漢字表の適用外と考えられているが、専門用語については、告示の「使用上の注意事項」において、「この表を基準として整理することが望ましい。」とされている。

- (2) 文部省学術奨励審議会の学術用語分科会において、自然科学および人文科学の分野の学術用語について、当用漢字表や現代かなづかいなどによる整理統一が進められている。

(注) 自然科学の分野では、数学編のほか10編、人文科学の分野では図書館学編と論理学編の2編が刊行され、進行中のものとして、気象学編ほか8編がある。

- (3) このほか、当用漢字表や現代かなづかいなどによってJIS用語や、工業標準用語が定められている。

(注) JIS用語 A 0002-63 建築モジュール用語ほか54編  
工業標準用語 鉄道・車両用語集ほか5編

### ⑤ 表外字の扱い方 その他

- (1) 当用漢字表の告示の「使用上の注意事項」に、「この表の漢字で書きあらわせないことばは、別のことばにかえるか、または、かな書きにする。」および「ふりがなは原則として使わない。」とある。

- (2) また、この表にある漢字であっても、次のおのおの場合の表記には、これを使用しないでかな書きとすることとしている。

ア 外国(中華民国を除く。)の地名・人名(ただし、「米国」「英米」等の用例は、従来の慣習に従ってもさしつかえない。)

イ 外来語

ウ 動植物の名称

エ あて字

#### ④ 専門用語

- (1) 専門用語で、ぜひとも必要な当用漢字表以外の字は、当用漢字表に加えるべきである。
- (2) 当用漢字表以外の字で、専門用語に必要な字については、別表を作るべきである。
- (3) 学術用語、J I S用語、工業標準用語などの専門用語のほかに、職業に固有の用語をどのように取り扱うかの問題がある。

#### ⑤ 表外字の扱い方 その他

- (1) 「この表の漢字で書きあらわせないことば、別の ことばにかえる。」とあるが、漢字がないからといって別の ことばにかえてしまうのは妥当でない。「全貌<sup>x</sup>」を「全体、全容<sup>x</sup>」、「涵養<sup>x</sup>」を「育成、養成、養う」などと言いかえなくてもよいようにすべきである。
- (2) また、「かな書きにする」とあるので、日常必要なことばでも、たとえば「挨拶<sup>x x</sup>」が漢字表にないという理由で、「あいさつ」としなければならない。さらに「所詮<sup>x</sup>、軽蔑<sup>x</sup>、甚大<sup>x</sup>、語彙<sup>x</sup>」などは、「所せん、軽べつ、じん大、語い」などと、いわゆる「ませ書き」をせざるを得なくなる。このような語の表現は漢字で書けるようにすべきである。

また、代名詞・副詞・接続詞・感動詞・助動詞・助詞は、なるべくかな書きにする。

(注) (ア) 昭和33年12月、文部省では「社会科手びき書」として、「地名の呼び方と書き方」を決定、これを昭和36年度の小学校、37年度の中学校の検定教科書から適用することとなった。

なお、「中国地名・人名の書き方の表」が国語審議会から建議されたが(昭和24.7.30)、地名については、上記の手びき書に採用されている。

(イ) 法令の用語用字の改善については、昭和25年11月7日および昭和29年3月15日に国語審議会の建議があり、これに即して昭和29年11月25日、法制局は法令用語の改正の方針を定めた。その内容は、①同音語、②似た意味のことば、③意味の通じにくいむずかしいことば、④当用漢字表・同音訓表にはずれた漢字を用いたことば、⑤当用漢字表にあってもかなで書くものの、おのおのについて書きかえの具体例を示したものである。

(ウ) 当用漢字の適用を円滑にするため、当用漢字表にない漢字を含んで構成されている漢語を処理する方法について審議し、昭和31年7月5日、「同音の漢字による書きかえ」を報告した。

## 2 漢字の選定方針および取捨選択について

### ① 選定方針および選定のための資料

(1) 選定の方針としては、告示の「まえがき」に「今日の国民生活の上で、漢字の制限があまり無理がなく行なわれることをめやすとして選んだものである。」とある。

(2) 「使用上の注意事項」に、「代名詞・副詞・接続詞・感動詞・助動詞・助詞はなるべくかな書きにする。」とある。したがって、

- (3) 「編輯<sup>×</sup>、叡智<sup>× ×</sup>、刺戟<sup>×</sup>」などを、「編集、英知、刺激」などと、同音の漢字による書きかえをしなくてもよいようにすべきである。
- (4) 表外字を使用する必要があるときは、ふりがなを用いてもよいことにすべきである。
- (5) 一般の生活に親しい動植物の名称に用いる漢字は、当用漢字表に入れるべきである。
- (6) 動植物の名称やあて字についても、当用漢字表にある字は用いてもよいとすべきである。

① 選定方針および選定のための資料

- (1) 漢字を制限する思想を貫いて、字数はさらに少なくすべきである。
- (2) 使用度数や字面の難易にかかわらずに、国民生活に必要な漢字を選定すべきである。
- (3) 固有名詞、動植物名のおもなものなどについても、これを漢



これらだけに使われる漢字は省くが、「私、彼」などのように、熟語構成力の大きいものは採用すること。

- (3) 同じく「使用上の注意事項」に、「動植物の名称は、かな書きにする。」とある。したがって、これらだけに使われる漢字は省くが、「牛、馬、犬、松、梅」などのように熟語構成力の大きいものは採用すること。

(4) その他の選定方針

ア 字形のむずかしいものは、原則として採用しないこと。

(鬱, 籤, 餐など。)

イ 特定の語だけに用いられて、他の字との熟語構成力の少ないものは省くこと。(挨拶, 曖昧など。)

ウ 訓だけしか与えられていないもの、またはおもに訓だけしか使わないものは、原則として採用しないこと。

(辻, 躰, 鉤, 据, 戾, 揃など。)

エ 同じ音であり、かつ意味も近いものは、原則としてその一方を省くこと。[総(綜), 欲(慾), 連(聯)など。]

オ 代用語の考えられるものは省くこと。[講和(講和)など。]

(注) 前掲表外字の扱い方その他のところで問題とした言い  
かえ・書きかえの趣旨

カ 官庁だけに使用されているものは省く。(俸, 牒, 傭など。)

キ 器物の名称として用いられているものは省く。

(鍋, 釜, 膳など。)

ク その他(闇, 憎, 詫など。)

ケ ただし、日本国憲法に使用されている漢字は、以上の方針にかかわらず、全部採用すること。

(且, 又, 但, 虞, 拷, 遵など。)

(注) 以上(4)は、昭和21年、当時の保科国語審議会幹事長の解説によっている。

字の選定方針に加えるべきである。(251 ページ, 253 ページおよび 257 ページ参照。)

- (4) 「代用語の考えられるものは省く。」という方針はやめるべきである。(255 ページ, 257 ページ参照。)
- (5) 憲法に使用されている字をすべて採用する必要はない。
- (6) 資料が新聞関係のものに偏している。他の分野をも含めて、漢字の使用度数、および語いの面からの科学的な実態調査の結果を基礎資料とすべきである。
- (7) 現在の 1,850 字を決めた根拠はあいまいである。これまで使われてきた漢字の実態(たとえば、明治・大正時代の代表的な文筆家の用いた漢字など。)を調査して、今日の社会生活において必要とされる字種を選択する必要がある。

(5) 前記の選定方針に従い、次の資料によって選定した。

ア 常用漢字表(昭和6年5月, 臨時国語調査会) 1,858字

イ 標準漢字表(昭和17年12月, 文部省) 2,669字

ウ 常用漢字表(案)(昭和21年4月, 国語審議会) 1,295字

エ 朝日新聞社常用漢字表(案)(昭和21年8月) 1,685字

オ その他各方面からの採用希望文字(カッコ内文字数)

内閣官房総務課(40), 内務省(7), 商工省(6), 大蔵省(19), 第2復員省(70), 運輸省(75), 農林省(49), 通信省(9), 毎日新聞社(434), 朝日新聞社(178), 日本経済新聞社(462), 東京新聞社(26), 文部省教科書局第2編修課(16)

カ 次のようなものに用いられている漢字の調査およびおもな参考資料

度量衡単位名, 貨幣単位名, 全国府県都市名, 助数詞, 師範学校教科書の科学用語集, 標準名づけ読本, 学士会員名簿, 憲法草案

大西雅雄著: 日本基本漢字

常用漢字表・標準漢字表の漢字選定の基準

その他各種の漢和辞典

## ② 取捨選択

昭和21年6月から同年10月まで, 漢字に関する主査委員会を23回開催, 前記資料にもとづいて漢字の取捨選択を行ない, 11月5日の国語審議会総会で「当用漢字表」を可決した。

(注) (ア) 昭和29年の国語審議会は, 「当用漢字表審議報告」として, 当用漢字表から削る字28字, 加える字28字などを文部大臣に報告した。(いわゆる補正案。)

(イ) 第7期国語審議会は, 「審議経過報告」の中で, 当用漢字表から削ってもよいと思われる字31字, 加えてもよいと思われる字47字を総会に報告した。

② 取捨選択

- (1) 現在の1,850字の中には、必要でないものが含まれているから、  
そういうものは省くべきである。
- (2) 字種の入れかえは、最小限にとどめるべきである。昭和29年の補正資料程度にとどめるべきである。
- (3) 地名・人名を考慮して、かなりふやしてさしつかえない。

この審議には、上記補正案のほかに、次の資料を利用した。

- (1) 国立国語研究所 昭和 31 年度 雑誌 90 種調査による使用度数 8 回以下の当用漢字 177 字，使用度数 9 回以上の表外漢字 323 字
- (2) 日本新聞協会提出（昭和 40.  $\frac{1}{4}:\frac{12}{19}$ ）の追加希望 15 字，削除可能 6 字案
- (3) 刑法改正関係で，法務省提出（昭和 40. 2. 19）の追加希望 13 字

### 3 当用漢字別表および学校教育との関連について

#### ① 当用漢字別表について

- (1) 訓令（昭和 23. 2. 16）に「国民教育における漢字学習の負担を軽くし，教育内容の向上をはかるためには，わが国の青少年に対して義務教育の期間において読み書きともに必修せしめるべき漢字の範囲を定める必要がある。」とある。

- (2) 昭和 22 年 9 月 29 日，義務教育用漢字主査委員会委員長報告に，次のような方針が述べられている。

ア 日常の社会生活に直接の関係をもち，一般国民に親しみ深いもの，ただし，形音義のむずかしいものや当用漢字におけるかな書きの条項にふれるのは，この限りではない。

（例） 数関係の一二三四，方位関係の東西南北など。

イ 熟語構成の力が強く，それが広い範囲におよんでいるもの。

（例） 名…人名，氏名，県名，名物 など。

ウ 広く世に行なわれている平明な熟語の構成成文で，対照的意義をあらわすそれぞれのもの。

（例） 公私，左右 など。

選定から除かれているものとしては，次のようなものがある。

① 当用漢字別表について

- (1) 時代の進展に即応して、教育漢字をふやすべきである。
- (2) 教育漢字は、現行以上にふやすべきではない。
- (3) 当用漢字別表は、読み書きともに指導すべき表として、その趣旨を堅持すべきである。
- (4) 当用漢字別表に、読める字（必ずしも書けることを要しないものの。）を加えるべきである。

- ア 時代の主流から遠ざかっているもの。(例)甲, 乙, 丙 など。
- イ 階層的なもの, 局处的なもの。(例) 官庁<sup>×</sup>, 通信<sup>×</sup> など。
- ウ 専門用語にしか関係をもたないもの。(例) 俳句<sup>×</sup>, 窯業<sup>×</sup> など。

② 学校教育との関連について

(1) 学習指導要領においては, 次のように処置している。

ア 小学校国語(昭和33.10.1文部省告示第80号)に, 「第6学年までに 配当されている漢字を中心とした800~881字ぐらいを読み, そのだいたいを書くこと。」とある。

イ 中学校国語(昭和33.10.1文部省告示第81号)には, 第3学年の「読むこと」の項に, 「当用漢字別表以外のおもな当用漢字に読みなれること。また, その他の当用漢字も読めるように努めること。」とあり, 「書くこと」の項に, 「当用漢字別表の漢字を使いこなすこと。」とある。

ウ 高等学校現代国語(昭和35.11.15 文部省告示 第94号)には, 「読むこと」の項に, 「当用漢字がじゅうぶんに読めること。」とあり, 「書くこと」の項に, 「当用漢字別表の漢字の使い方を身につけるとともに, その他の当用漢字の中のおもな漢字が正しく書けるようになること。」とある。

エ 古文および漢文については, 次のように述べられている。

(ア) 中学校国語の第3学年「読むこと」に, 「現代語訳や注釈などをつけたり書き下したりして理解しやすくした古典などを用いることを考慮し…」とある。また, 「第3 指導計画作成および学習指導の方針」の3に, 「なお, 古典については, 基本的なものに適宜触れさせ, 古典に対する関心をもたせるように留意する。」とある。

(イ) 高等学校古典乙Ⅰ(古文)に「(3)指導にあたっては, 次の点を考慮する。」とある。

「ウ 古文の文章は, その表記を読みやすいようにくふうし

② 学校教育との関連について

- (1) 指導要領の「おもな当用漢字」とは，どのような字であるか不明である。
- (2) 義務教育期間に，当用漢字のすべてを書くことができなくてもよいが，完全に読めるようにすべきであり，高等学校では当用漢字のすべてを正しく書けるようにすべきである。
- (3) 学年配当については，字種の学年別配当が問題である。



たものを取り上げ、現代語訳や注釈や解説などを適切に用いて、理解しやすいようにする。」

(ウ) 同じく(漢文)に「(3)指導にあたっては、次の点を考慮する。」とある。

「エ 漢字学習の負担が過重にならないようにし、また、訓読などについては、文語文法などとの関連に注意して無理のないように指導する。」

(注) (ア) 当用漢字別表の881字については、昭和31年5月7日、教育課程審議会会長から文部大臣に対して、「教育漢字の学年配当について(答申)」が提出された。

(イ) この答申にもとづいて、小学校学習指導要領(昭和33.10.1文部省告示)の国語科の項の末尾に、「学年別漢字配当表」(1年46字、2年105字、3年187字、4年205字、5年194字、6年144字)が示された。

(2) 教科用図書検定基準内規(昭和33.12)には、次のように述べられている。

#### ア 小学校

(ア) 国語科を除く各教科において使用する漢字は、学習指導要領国語の学年別漢字配当表に示された当該学年までの漢字の範囲内に限ることとし、その用い方については、「当用漢字音訓表」による。ただし、第3学年以上の場合に限り、当該学年に配当されている漢字は初出の際に読み方を示すものとする。

(イ) 固有名詞または教科に関する専門的な用語について、やむを得ず(ア)によらない場合は、初出の際に読み方を示すこととする。

#### イ 中学校・高等学校

(ア) 使用する漢字は、原則として当用漢字表の範囲内に限り、



その用い方については、「当用漢字音訓表」による。

- (イ) 固有名詞または教科に関する専門的な用語について、やむを得ず、(ア)によらない場合は、初出の際に読み方を示すこととする。

### 〔当用漢字音訓表〕

#### 1 音訓の整理に関する方針について

- (1) 告示の「まえがき」に、「この表は当用漢字表の各字について、字音と字訓との整理を行い、今後使用する音訓を示したものである。」とある。
- (2) 同じく「この表の字音は 漢音・呉音・唐音および慣用音の区別にかかわりなく、現代の社会にひろく使われているものの中から採用した。」とある。
- (3) 同じく「この表の字訓は、やはり、現代の社会にひろく行われているものの中から採用したが、異字同訓はつとめて整理した。」とある。

#### 2 音訓の取捨選択について

- (1) 昭和 22 年 9 月 29 日、音訓整理主査委員会委員長報告によれば、次のとおりである。

ア 古訓の整理 朝(あした)、古(いにしえ)など。

イ 解釈訓の整理 報(しらせ)、効(ききめ)など。

ウ 同訓の整理 きく-聞く (聴は認めない。)など。

きず-傷 (創は認めない。)など。

エ かな書きの法則による訓の整理

副詞 凡(およそ)、頗(すこぶる)など。

助動詞 如(ごとし)、可(べし)など。

オ 熟字訓 今日(きょう)、流石(さすが)など。

カ 特殊訓のあるものを認めること。